

2017 年度日本菌学会菌類観察会（銚子フォーレ）報告

糟谷 大河（千葉科学大学）

2017 年度日本菌学会菌類観察会（銚子フォーレ）は、9 月 22 日（金）から 24 日（日）の 3 日間、千葉菌類談話会ならびに菌類懇話会の共催により、君ヶ浜しおさい公園（銚子市）および千葉県立東庄県民の森（香取郡東庄町）の 2 か所を観察地として実施された。銚子フォーレには千葉菌類談話会も共催団体として参画し、数名の会員が実行委員会に加わり、事前準備や当日運営等を分担して行った。千葉菌の幽霊（？）会員である私自身も、銚子フォーレ実行委員長を仰せつかり、身に余る任務ではあったが、皆様のご指導のおかげで責任を果たすことができた。

千葉県からは 700 種以上の大型菌類（きのこ類）の分布が報告されているが（吹春ほか、2017）、銚子市をはじめとする県北東部での菌類相の調査は不足しており、これまで 110 種程度のきのこ類が銚子市から知られている（糟谷ほか、2016）のみであった。したがって、今回のフォーレに全国からプロ・アマを問わず、幅広い分野の菌類研究者の方々に参加していただくことで、銚子周辺の菌類相の解明が一挙に進むことが期待された。一方、千葉県ではこれまでに 2 度（1967 年と 1985 年）、いずれも東京大学千葉演習林（鴨川市）で日本菌学会のフォーレが開催されているが、今回は沿岸部の平地林や海浜を観察地にするという試みで、果たして皆様に満足いただける収穫が得られるのか、準備を進めつつも不安が募っていった。

2017 年 6 月に参加申し込みが始まってからは、果たしてどれほどの方々にお申込みいただけるのかと心配していたが、最終的には定員の 80 名を超える申し込みがあり、胸をなでおろした。しかしその後、8 月後半から 9 月中旬にかけての銚子周辺は少雨と高温に見舞われ、きのこ類の発生に芳しくない天候が続いたことから、フォーレ当日はどうなってしまうのかと不安の日々が続いた。

やきもきとした私の心をよそに時は瞬間に過ぎ、フォーレの当日がやってきた。開会式の前日まで好天が続いていたが、天気予報では、フィールドに出る肝心の 2 日目が雨の予報になっている。銚子は太平洋に突き出した地形をしているため、雨が強まると海からの潮風も強まり、外で長時間活動するのは困難になる。どうにか荒天にだけはならないことを祈るしかない。



図 1. 千葉科学大学マリナーキャンパスに設置された銚子フォーレの看板。

受付や開会式、講演会、同定会の会場は、千葉科学大学（銚子市）のキャンパスを利用した（図1）。会場設営は、早めにお越しいただいた実行委員や、私の研究室に所属する学生たちのパワーでばっちり整い、ありがたい限りであった（図2）。初日は、昼過ぎから次々と到着される参加者を受付でお迎えした後、14時より開会式に続き講演会が開催された。



図2. 準備がばっちり整った受付。

講演は2題で、初めに私が「千葉県銚子市とその周辺地域の菌類相」という演題で話題提供した（図3）。銚子周辺の地理、気候や植生を説明した後、この地域の菌類相の特徴や、特筆すべききのこ類（海浜生のケンボウズタケ属や *Gastrosporium* 属菌など）および植物寄生菌類（ヤブニッケイ黒穂病菌 *Climoconidium onumae* (S. Ito) Kakish., Nagao & Denchev やカナリーヤシ黒つぼ病 *Graphiola phoenicis* (Moug. ex Fr.) Poit. など）について紹介した。

次に、国立科学博物館の保坂健太郎博士に「これまでのフォーレで見えて来た (?) 大規模標本処理の難しさと手ごたえ」と題してご講演いただいた（図4）。最近の日本菌学会のフォーレでは、大量の採集品を同定し、番号を与えて写真撮影し、DNA 抽出用サンプルを調製した後、乾燥標本にするという作業を、短時間（半日～一日）のうちにやってい

る。この取り組みにより大きな成果が得られていることと、その一方で、様々な技術的な課題も生じていることを具体的に紹介していただくとともに、無理せず、皆で楽しめる今後のフォーレのあり方についても提案をいただいた。



図3. 糟谷が、銚子周辺の地形、植生や菌類相の特徴等について紹介した。

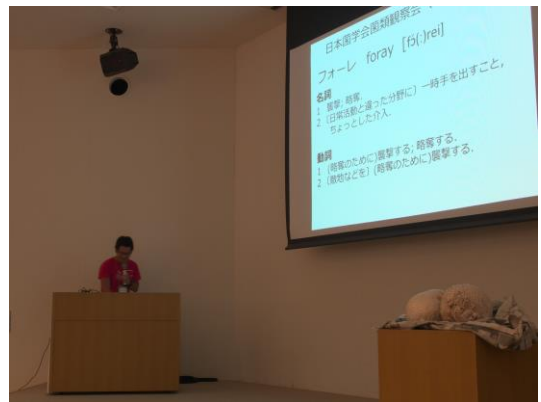


図4. 保坂博士による講演。フォーレ (foray) とは、襲撃するとか略奪するという意味がある。

講演会の後はオリエンテーションが行われ、実行委員および千葉科学大学の学生により、観察地のコースや注意事項等の説明がなされた（図5）。どちらも周辺には民家もあり、遭難が想定される観察地ではないが、君ヶ浜しおさい公園は園内の案内板が少なく、道に迷いやすい。また東庄県民の森には急斜面の場所も多くあるため、今回は観察地のコ

ース案内のプリントをカラー写真入りで作成し、参加者に配布した。特に、君ヶ浜しおさい公園は海沿いであることから、津波ハザードマップを示し、地震・津波発生時の避難経路についても周知した。



図5. オリエンテーションでの説明に聞き入る参加者。

オリエンテーションを終え、会場を大学から銚子プラザホテルに移し、18時半より記念撮影の後、懇親会となった。日本菌学会の山岡裕一会长および菌類懇話会の松井英幸代表によるあいさつがあり、千葉菌類談話会の金城典子会长による乾杯の音頭で懇親会が始まった(図6)。懇親会では、プロ・アマ



図6. 金城会长による乾杯のご発声。

を問わず参加者同士での交流が積極的になされ、各地のきのこ情報の交換や、菌類愛にあふれた話題で大いに盛り上がった。

初日は雨が降り出さずに済んだものの、2日目は予報通りの雨模様である。ただ、宿舎となったホテルサンライズ銚子を朝8時半に出発する頃には比較的小降りとなり、何とかフィールドワークができそうな天候であった。点呼をとり、2台のバスに分かれて、君ヶ浜しおさい公園と東庄県民の森に向けて出発した。両観察地には、千葉科学大学の学生を4～5名、案内役として配置した。

私は初めに君ヶ浜しおさい公園に顔を出したが、案の定、海沿いは雨だけでなく風も強かった。たくさんの方々にはるばる銚子まで来ていただいたのに、悪天候の中での観察会となってしまい、誠に申し訳ない気持ちであった。私はその後、実行委員会本部が置かれた千葉科学大学キャンパス内の同定会場に向かったが、皆様がどんな菌類に出会うことができるか、気が気でなかった。

昼前には君ヶ浜しおさい公園から、昼過ぎには東庄県民の森から、それぞれ参加者の皆様が同定会場へと戻ってこられた。お話を伺うと、徐々に雨脚も弱くなったとのこと、そして、同定会場の机の上には思いのほか多くの採集品が並び、ひとまず安堵した。

君ヶ浜しおさい公園は、大吠埼に隣接した約1kmの海岸沿いの自然公園で、クロマツ、タブノキ、オオバヤシャブシ、オオシマザクラなどの樹種からなる混交林が広がっている。今回、林内ではイッポンシメジ属、チャツムタケ属、ホウライタケ属、ウラベニガサ属など主に腐生性のきのこ類を中心に観察されたが、全体にきのこ類の発生は少なかったようだった。一方、林の外側にはコウボウシバ、コウボウムギ、オニシバ、ネコノシタ、ハマゴウ等からなる海浜植生が見られ、ここではキシボウズタケ属、ドングリタケ属、ヒメツチグリ属など、複数の海浜生のきのこ類

が見つかり、歓声が上がっていた（図7）。



図7. 君ヶ浜しおさい公園の海浜での観察。

東庄県民の森は、スダジイやアカガシなどの常緑広葉樹を主体とした森林公園で、今回はテングタケ属菌が比較的多く発生していたようである。また、ニセショウロ属や地下生菌の一種ネズミツチダマタケ *Rossbeevera griseovelutina* Orihara など、外生菌根性のきのこ類を中心に、様々な菌類が採集できた様子であった（図8）。



図8. 東庄県民の森での観察。

銚子フォーレでは、標本の仕分けと陳列のため、2つの部屋を同定会場として利用した。野外から帰着した後、まず採集品の仕分けや同定カード記入を講義室で行い、その後、隣接する広い実験室の実験台にそれらを陳列した。そして、数名の同定担当者やその補助者により、陳列された標本と同定カードの照

合・確認作業が進むとともに（図9）、撮影担当者により次々と標本の写真撮影が行われていった。また、実験室内には生物顕微鏡を数台設置し、採集品の顕微鏡観察を自由に行えるように準備した。顕微鏡を覗きながら、また参加者が持ち寄った文献と採集品を見比べながら、同定会場の随所で熱い議論が交わされていた。



図9. 採集品を前に意見交換。

これらの作業が一段落した後、同定担当者の中から3名が代表して、採集品についての解説を行った。主にハラタケ型きのこ類について、日本きのこセンター菌草研究所の長沢栄史先生が、硬質菌類について森林総合研究所の服部力博士が（図10）、腹菌型きのこ類について私が、今回採集された特徴的な種に関してそれぞれ説明した。その後、17時半に



図10. 服部博士による硬質菌類の解説。

は大学内の食堂で夕食をとり、いったん解散となったが、同定会場に戻って標本整理や写真撮影を続ける参加者もあった（図 11）。



図 11. 採集品の写真撮影が夜遅くまで続いた。

3 日目は、朝 9 時から閉会式が同定会場にて行われた。北海道や広島県など、特に遠方からの参加者を中心に近況を報告していた後、日本菌学会の山岡会長から結びのあいさつがあった。また、日本菌学会の名部みち代国内集会担当理事から、島根県での開催が予定されている次期フォーレについての説明がなされ、解散となった。

今回は、開催直前まで少雨と高温の日々が続き、そして当日になっての降雨・強風と、

天候に恵まれたとは言い難いフォーレであった。しかし、それでも北海道から沖縄まで、全国の菌類を愛する 86 名の方々にお越しいただいた（図 12）ことで、予想を上回る多くの標本が集まり、銚子周辺の菌類相を共に調べて学ぶ貴重な機会となった。また、事故もなく、無事に全日程を終了できたことに感謝、感謝である。中でも、銚子フォーレ実行委員の皆様のお力により、準備から当日の運営、事後の業務まで円滑に進めることができた。さらに、会場を提供いただいた千葉科学大学の関係者各位、そして裏方として、事前準備や当日の運営に協力いただいた、千葉科学大学糟谷研究室の学生各位ほか、お世話になったすべての方々に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 吹春俊光・腰野文男・服部力（2017）東京大学千葉演習林の大型菌類相。千葉中央博自然誌研究報告特別号 10: 393-410.
 糟谷大河・池田美紀・小林一樹・埴祥太・三上愛・御山右貴・梅内基裕・大森茉耶・岡山美千（2016）千葉県銚子市の大型菌類相—2013 年～2015 年調査結果より—。千葉科学大学紀要 9: 43-58.



図 12. 銚子フォーレ参加者の集合写真。